

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年6月11日現在

機関番号：32627

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21520343

研究課題名（和文）フランス第二帝政期における技術革新と文学

研究課題名（英文）Technological innovation and literature in Second-Empire France

研究代表者

篠田 勝英（SHINODA KATSUHIDE）

白百合女子大学・文学部・教授

研究者番号：20129894

研究成果の概要（和文）：

本研究では、フランス第二帝政期の雑誌第二期『パリ評論』を題材に、この時代を特徴付ける進歩主義的言説や、その基盤となったテクノロジーの飛躍的發展が、文学をはじめとする諸芸術といかなる関わりを持ったのかを検証した。フランス国立図書館のサイト Gallica に PDF ファイルとして公開されている『パリ評論』を全巻冊子化し（38分冊、約20000頁）、目次をデジタル化するなど資料面での整備も行い、またその過程で汎用性の高いデータベース構築の可能性を検討して、論考にまとめた。

研究成果の概要（英文）：

This study takes as material the Second-Empire era periodical *Revue de Paris*, second series, and enquires how the discourse of progress which was characteristic of the age, and the dramatic developments in technology which underpinned that discourse were related to the literature and other arts of the period. The corpus of the *Revue de Paris* is available at the site *Gallica*, Bibliothèque nationale de la France, as PDF files. We improved its usefulness by printing out all its numbers in book form for easy consultation (38 vols., about 20 000 pages), and also digitalizing its contents pages. In the process, we considered the possibility of building a more versatile database out of the corpus and set out our suggestions.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,700,000	510,000	2,210,000
2010年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ文学（英文学を除く）

キーワード：仏文学、19世紀、フランス、進歩、パリ評論

1. 研究開始当初の背景

文学テキストに内在する諸問題、また間テクスト性に関わる事柄とは別の次元で、文学と社会の関係を考察したいという動機に基づき、テクノロジーとジャーナリズムが飛躍的な発展を遂げた19世紀中葉のフランス、すなわち第二帝政期に着目した。この時代を代表する詩人ボードレールについて「ボードレールと進歩」の標題で学位論文を仕上げた海老根と、かねてから19世紀の技術革新を象徴する鉄道というシステムが同時代人にもたらした意識変革に関心を抱いていた篠田、両者の志向が交叉して、以下に詳述する研究の最初の着想が得られたのであった。

2. 研究の目的

今回の研究は、テクノロジーの発展が人間の意識のありようにどのような変化を及ぼすのか、またこの変化がテクノロジーの更なる展開といかなる相関関係を結び得たのかという問題に着目しながら、第二帝政期フランスの芸術作品、特に文学作品に新たな光をあてることを目的とする。同時に、研究の過程で収集した資料は、文書、画像などその形態を問わず、必要な時にすぐ取り出すことができ、また必ずしも明示的ではない相互の連関をさまざまな切り口から顕在化できるようにすることが望まれるが、そのためには、デジタル化によって何らかのタグを付けて保存する、一種のデータベースの構築がもっとも効率的であろう。そうした観点から、他のさまざまな研究に基礎的な素材を提供しうる汎用性の高いデータベースの構築を目標として、その方法論を模索し、できる限りの具体化を図る。

3. 研究の方法

(1) コーパスの確保

研究計画の実施に当たっては、ゴティエ、フロベール、ボードレール、ネルヴァルなど、多くの作家たちの作品を掲載すると同時に、第二帝政期を特徴づける進歩主義の主張をもっとも明確に打ち出した雑誌、第二期『パリ評論』 *Revue de Paris* (1851-1858) のテキストを常に参照可能にすることから始める。この雑誌のリプリントはこれまで調べたかぎり、なされたことがないか、あるいはかなり以前から品切れないし絶版になっていて、市場に流通してはいない。したがって何らか

の手段で複写を行なう必要があるが、全国の大学図書館で第二期分を揃えているところは **Webcat Plus** 等のインターネット検索で見ると、なさそうである。一方フランス国立図書館のサイト **Gallica** には、2009年の時点において、およそ8割ほどがPDF版でアップされ、簡単にダウンロードできるようになっていた。PDF版をコンピューターのディスプレイ上で読むのは、それなりの利点もないではないが、必ずしも読みやすくはないし、健康上の問題を呈しやすいことはいうを俟たない。したがって冊子体のものを作成する必要があるが、余白等の版面の修正が可能であれば、両面印刷と簡易製本により可読性の高い冊子を作成するのは、さほど困難ではないと予想できた。ただし巻数・頁数ともに膨大なものであるから、これは最初の方針を慎重に立てる必要がある。またきわめて単調な作業であるから、方針確立後はアルバイトを活用すべきであろう。その間、**Gallica** で提供されていない部分は、まず大学図書館等の公的施設所蔵本を根気よく探し、また古書情報なども幅広く渉猟し、漏れのないようにする。これを第一段階の作業とした。

(2) コーパスの分析・検証と作業の効率化

すでに一定の分量のテキストは、画像データとして簡単に入手できるのであるから、『パリ評論』の閲覧・購読・分析はただちに開始できるが（個人レベルではすでにある程度進めている）、その作業を効率化するための工夫、とりわけコンピューター利用による効率化は積極的にこれを試み、採り入れていくこととした。その一環として、たとえば規模の大きいコーパスの場合、全体をコンピューター可読形式に変換する、いわゆるデジタル化が望まれるところであるが、第二期『パリ評論』の場合はフランス国立図書館の公開する前記PDF版だけでも18000頁を越える分量であるから、これをテキストファイル化するのは、それ自体でひとつの大きなプロジェクトになるくらいの規模であり、まったく現実的ではない。また多くの大辞典・百科事典のCD-Rom、DVD-Romによる一種の復刻において用いられている、PDF版の画像ファイルにテキストを埋め込む方法でも、個人の研究者が手を出せる規模の作業ではないので、実用的ではない。しかしながらひとつの定期刊行物総体をコーパスとする以上、全体の見取り図の作成と、個々のコンテンツ

参照の効率化が何より求められるのであるから、『パリ評論』については、四半期ごとの目次をデジタル化する。さらに作家別、テーマ別のインデックス作成を試みる。その際、当然スキャニングと OCR ソフトの利用は必須であり、高速なコンピューターの導入が必須となった。第二段階の作業は上記のようなものとなったが、第一段階と第二段階の作業はそれぞれの進行にともない、並行して進めることが可能であるから、計画初年度から開始することとした。

(3) 外部情報の収集

こうしてアクセスの容易になったコーパスを、「研究目的」で詳述した方向性にしたがって、分析・検証・整理していくわけだが、この作業の成果を開かれたものとするために、補足的な外部情報をできる限り収集し、かつコーパス内の諸要素とリンクさせていく。具体的には、『パリ評論』に登場する重要人物の作品（特に全集等に未収録のもの）、およびテクノロジー関連の具体的資料が中心であり、これらは文字資料と画像資料の二種に分類できるが、その処理については後述のデータ・ベースの項で詳述する。

(4) 現地調査

『パリ評論』というコーパスは第二帝政という時代・環境の産物であるから、同時代のさまざまな出版物と密接な関連を持っており、その中にはフランス国立図書館（BNF）等に赴かなければ参照できない資料が少なくない。またこれまで述べた作業はすべて何らかの形で複製を用いたものであるから、一度はオリジナルの紙質に手を触れ、インクの匂いをかぐという経験が必要であろうと考えた。さらに「研究目的」で述べたテクノロジーと文学という視点からの研究には、BNFのみならずオルセー美術館、国立工芸院（Arts et Métiers）、交通博物館（コンピューニュ博物館）等の所蔵資料参照が不可欠である。そのために初年度と次年度の夏期休暇を利用して現地調査を行なうこととした。

(5) 資料処理とデータベース

テクノロジーに関わる研究は具体物を対象とすることが多い。その際、画像資料が決定的な役割を果たすことはいままでのない。従来そのような画像資料はコピー、写真で提供されるのが通例であるが、本研究においては、印刷物、写真を含むあらゆる画像資料をデジタル化して、保管・整理することを心がける。そのようなデータ収集を行なう際に、立体物の画像化のためにはデジタル一眼レフカメラが、最近著しく性能が向上していることもあってきわめて便利であり、また状況に応じては、携帯スキャナーとして有効であることも夙に指摘されている。このような機器の積極的な導入に努めるという方針を立てた。

また文字資料の場合は、資料の性質により、画像のみとして保存する場合もあれば、手入力ないし OCR 利用のデジタル化を行なう場合もあり、後者においては検索が容易になることが期待できる。純然たる画像資料の場合も、キーワードを付加することにより、機械的な検索が可能になるが、これはデータベース構築という発想に直ちにつながっていく。資料の整理、分類、集積を行なうことを基礎として、そのシステムティックな利用法を開発することで、当該資料のデータベース化を視野に入れることができる。本格的なデータベースは個々のデータのフォーマット、検索方法の効率化等々の面で慎重にデザインしなければならないが、とりあえず収集したデータに簡単な加工を施すことで、第三者に提供可能な簡易データベースを構築できるという考え方が出発点となった。その次の段階に至るには、データベースに関する高度な理論的・実践的研究が不可欠であろう。しかしながら個人ないし小グループの利用においては簡易データベースもそれなりの有効性を持ち、さらには汎用性を持たせ、さまざまなテーマの研究においてデータ入力をルーティン化させ、研究自体の効率化を図ることができると思われる。とりわけ研究開始時点で視野に入ってきたのは、インテル社製 CPU を備えたマッキントッシュ上でのみ作動する BENTO というデータベース・ソフトウェアであった。このソフトはデータの性質が文字の場合はテキストファイルであろうと、書式・フォント情報を含むファイルであろうと、また画像ファイル、音声ファイルの如何を問わず、あらゆるファイルをデータとして投入し、比較的簡単な検索方法で、一定の条件を満たすデータを取り出すことができる、とされている。カード型データベース、レイショナル型データベースとはひと味異なる使用感のデータベースという評判のこのソフトウェアが、文学研究にどこまで有効か、試用・検証を経て実用化に達することが期待された。

(6) 研究方法と研究目的

ただし強調しておかなければならないのは、データベース構築はそれ自体が目的ではなく、その効率的な運用により、データの検証、相互比較等々を深化させ、「研究目的」を達成するのを目標にするということである。これは資料の収集・整理・分類・統合を遂行する際に、不断に意識しておくべき理念であろう。もっとも『パリ評論』というメディアに依拠した研究は、それ自体が最終目的ではなく、多様な文学研究に利用、応用、適用が期待される企画である。その副産物としてのデータベースも当然汎用性を持つことが前提となる。その意味において、本研究は第二帝政期の文学、社会、科学技術それぞれ

と、またそれら相互の関係の研究に資することを使命とする開かれた研究になると確信している。

4. 研究成果

(1) 2009 年度の最大の成果は、フランス国立図書館デジタル書籍刊行部門 Gallica の提供する『パリ評論』の PDF 版のうち、その時点で入手できる分を印刷・製本したことであろう。全体で 33 分冊、約 18 000 頁に達する膨大な規模のものであるが、各巻の目次をデジタル化してあるので、検索はかなり容易であり、同誌初出で未刊行の論考・論説に関して、今後の利用がおおいに期待できる。

データベース構築に関しては、高性能のパーソナル・コンピューターを導入、複数のデータベース・ソフトを比較検討した。

諸般の事情により、研究分担者・海老根の現地調査は中止のやむなきに至ったが、その分の予算を資料探索・収集に充当することが可能になり、第二帝政下フランス社会の諸相にわたる相当量の資料を一定程度システムチックに収集できたのは、かえって幸いであり、『パリ評論』と合わせて、本研究の趣旨に沿って活用する準備ができた。

準備作業に割いた時間と労力が予想外に多く、年度末までに刊行に至った論考のないのがまことに残念であるが、篠田は 19 世紀の鉄道の発展に関する考察の準備作業としてエッセー一篇を執筆、一方海老根は本研究のテーマに即して、文学における産業礼讃とそれに対するボードレール等の反応をテーマとする論文を執筆、これはのちに、ボードレール研究の中心となっている定期刊行物 *L'Année Baudelaire* に掲載される運びとなった。

(2) 2010 年度は前年度に収集・蓄積した資料の検証と、現地調査および現地での資料収集、また研究協力者である白百合女子大学辻川慶子専任講師を加えての研究会開催の三つを主たる柱として研究を推進した。

収集資料はかなりの量に上り、その検証はその時点でなお進行中であつたが、研究会での報告には活用された。なおフランス国立図書館 BNF のデジタル・アーカイブ Gallica では第二帝政初期の『パリ評論』の PDF 版が完結したため、国内外の図書館所蔵図書を参照する必要がなくなり、前年度に引き続き残りの巻を印刷・製本して、随時参照できるようにする態勢を整えた。

現地調査において、篠田はコンピエーニュの Musée national de la Voiture et du Tourisme、国立工芸院附属博物館 Musée des Arts et Métiers を訪問、展示物の閲覧・参照はもとより、所蔵図書の閲覧、販売資料の購入の機会を得た。その他に BNF での文献調査・閲覧、古書店での 19 世紀の鉄道に関する一次資料

の購入等、現地調査ならではの成果を上げることができた。海老根は BNF において『パリ評論』掲載記事の同時代的文脈を再構成するため、1850 年代に進歩の主題を扱ったさまざまな書き手の著作や記事を集中的に調査した。

研究会は、4 月 26 日、7 月 20 日、9 月 7 日、10 月 26 日、2 月 28 日の計 5 回開催し（9 月 7 日はパリで開催）、各自による研究中間報告と、共同作業の調整・打ち合わせを行った。さいわい同じ勤務先の三名であるために十分な時間をかけ、所期の目的を達成できた。

主として篠田の担当するデータベース構築の試みは、Bento と FileMaker Pro のふたつのソフトウェアがどちらもわれわれの考える内容、使いやすさの点で一長一短であるために、本格的な作業に入れられないままであり、次年度に持ち越すこととなった。

(3) 2011 年度は、前年度までに引き続き辻川講師に協力してもらいながら、資料の最終的な収集・整理を行ったうえで、篠田はデータベース構築のための技術的な検討を進め、海老根は成果のまとめと今後の研究のさらなる発展の可能性を 2 本の論考として発表した（「産業的進歩の時代の文学—第 2 期『パリ評論』研究のための予備的覚書」、および「ボードレールと産業的進歩：1850 年代におけるある文学論争」（仏語論文））。データベース構築に関する篠田の研究の成果の 1 部は、論考「中世文学研究とコンピューター」に反映されている。資料面での成果としては、本研究の主要な対象である雑誌第 2 期『パリ評論』の PDF ファイル（フランス国立図書館、Gallica 提供）のうち、新たに利用可能となった分（5 分冊、約 2 600 頁）の作業を終え、すべての巻・号について印刷・製本・目次のデジタル化を完成させたことが大きい。なお『パリ評論』誌の電子テキストの利用が、Gallica の提供するデータにより現実的なものとなりつつある。これに依拠したテキスト・データベースの構築は今後の課題としたい。さらに篠田は、19 世紀中葉の交通事情の資料収集整理を進め、ラザール兄弟の『一八五五年パリ街路・記念碑歴史事典』所収の街区ごとの地図を、A3 サイズに拡大複写し参照の容易な冊子としたほか、フランスの鉄道史研究のグループ 2 つに加盟し機関紙の購読を開始するなど、鉄道史関係の資料の広汎な収集を行なった。

海老根は第 2 期『パリ評論』に関係する文学者たちを研究するための基礎的資料のひとつ『ミショー世界伝記事典』初版（含：神話篇）を購入した。なお、不定期ながら数度にわたり行った研究会には辻川講師にも参加してもらい、本プロジェクトの研究を踏まえた成果として、3 本の論考（「ネルヴァルと歴史のエクリチュール—『塩密輸入たち—ビ

ニコラ神父の物語』を中心に」、「文学作品の
独創性と借用—ネルヴァル『ニコラの告白』
の場合」、「19世紀、孤児たちの物語—ユゴー
からヴェルレーヌまで」) が得られている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者に
は下線)

[雑誌論文] (計3件)

海老根龍介「産業的進歩の時代の文学—第2
期『パリ評論』研究のための予備的覚書」(『白
百合女子大学研究紀要』、査読無、47巻2011
年、43-59頁)

Ryusuke Ebine, *Baudelaire et le progrès
industriel : un débat littéraire dans les années
1850*, (*L'Année Baudelaire*, 査読有、13-14巻、
2011年、91-118頁)

篠田勝英「中世文学研究とコンピューター」
(アウリオン叢書『語学・文学研究の現在 I』
査読無、9巻、2011年、25-37頁)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

篠田 勝英 (SHINODA KATSUhide)
白百合女子大学・文学部・教授
研究者番号：20129894

(2) 研究分担者

海老根 龍介 (EBINE RYUSUKE)
白百合女子大学・文学部・准教授
研究者番号：40439500

(3) 連携研究者

なし